（書　評）

岩坂泰信著『黄砂　その謎を追う』
（紀伊国屋書店、2006年）

西井　啓子*

2011年 9 月30日受理

ジャンルは、科学書であるが読者対象の広い一般向けに書かれている。著者は黄砂研究では、世界的にも第一人者として名を馳せている研究者である。しかし、読んでいて堅さを感じさせないのは、著者の人間性、多岐に亘る知識の広さ、深さゆえであろう。

本書は黄砂の正体、発生のメカニズムの研究の最前線の様子を書いたものである。日本で気象学者が、黄砂に興味を持つようになった最初のきっかけは、「黄砂が氷晶を作る時の種になる」ことを明らかにした研究である。

当時（1959年）人工降雨技術の向上と安定した水力発電への期待があった。その後、火力発電が中心となって次第に関心は薄れた。しかし、「地球環境の時代」になり（1980年前後から）黄砂は、再び地球規模での温暖化現象や環境変化などの観点から、軽視できないものとして研究されるようになってきた。

黄砂は困り物としてのイメージが強い。事実、中国では家畜や人を襲う。日本に住んでいる人が想像できないほど厄介なものである。韓国の研究グループは、黄砂が見られた日のソウル住民の死亡率を調べた結果「死亡率が高くなっており、特に高齢者の死亡率が高まる傾向がある」という研究結果をだしている。中国、韓国では、時に外出禁止が発令される。日本の医学分野でも関心を持たれ、黄砂が多い日には気管支系の外来患者がふえると、聞いたことがある。目には見えないミクロの黄砂の世界を、その活動、習性、姿を通してマクロの世界へと導く。黄砂は、大気中の亜硫酸ガスと反応して大気汚染物を掃除してくれるのではないか、また、黄砂が酸性雨を緩和している、と推測されるようになった。黄砂は日本から太平洋を渡りアメリカまでも移動している。太平洋で海の底に沈み、プランクトンの餌にもなる。また黄砂に微生物が住み着き、その微生物にとっては黄砂の一つ一つが広い地面であるかもしれないと。

黄砂の集団が空の旅をするその先々で、そこにある環境に影響を与えていることも明らかになってきた。

我々の日常生活では、各分野の研究結果だけが知識として取り込まれていることが多い。本書は、そこに至るまでのプロセスや、長年の韓国、中国、敦煌でのフィールドワークの悲喜こもごもの物語－現地の景色、食文化、歴史、みやげもの屋でのやりとりetc、厳しさと緊張がセットの合間にある、ほっとする“楽しみ”－を通して「知る」面白さを感じさせてくれる。著者曰く、「自然を見る人間が、新しい視点を得た時、自然は再び新しい側面を見せてくれる。黄砂についてもそうである」と。

今、明らかになっている研究結果から、著者は黄砂を「空飛ぶ化学工場」のように考える視点を示した。そこに至るまでの黄砂の謎解きへの挑戦を、“黄砂物語り”風にわかり易く紹介された傑作である。出版当時、科学書にしては珍しく何紙もの新聞の書評欄、週刊誌にも取り上げられた。因みに、養老孟司著「バカにならない読書術」にも紹介されている。

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：西井　啓子
〒590-0014　堺市堺区田出井町2－8
大阪健康福祉短期大学　事務センター
E-mail: k.nishii@kenko-fukushi.ac.jp